

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

街歩きの効用

街を歩くことが好きだ。大の散歩でもなく、健康のためのウォーキングでもなく、ただ何となく家々を見て回り、何かがあるかしらとあっちの路地、こっちの路地とふらふら歩くのだ。

最近、我が家の近辺では解体現場が多い。『あら、またここが空き地に！』と驚き、『そういえばあの家のおばあ様を最近見かけないわ。もしかしたら……』と、心配する。

戦後の粗製乱造で建てられた住宅はほぼ建て替わったといわれる今、家を取り壊される要因は相続が多いと聞く。家族意識が高まっているとはいえず、家意識は別のようだ。誰が相続するのか、その他の資産はあるのか、相続税は払えるのか、と思索していくなかで、売ってしまうのが一番早い解決策となる。

もともと不動産はもめやすい。預貯金のように法定相続人の取り分通りに単純に分けてしまうことも出来ず、取り分だけでは語れない家の歴史があり、関わり度合い、愛着度合いなどもまちまちで、単純に切って割るわけにはいかないのだ。

いろいろもめた結果、やはり売ることになる場合が多く、売るとなれば家を取り壊して、更地の方が売りやすいとなる。解体が進み、散歩中でも「売り地」の立て看板が目につく。

リフォームの仕事をしている側からみると、一見古いだけに見える家も、その家ながらの良さを生かして再生し、家の新しいスタートを切れるのにと残念に思う。もちろんどんな家でも使い切り、延命するのがいいのだとまでは思わないが、結果としてその道路沿いの街並みがどんどん変わっていく。

知人のフリーライターが随想で「まちから消える生活感」について、古いけれど手入れの行きとどいた建物、鳥が集まる大きな樹、季節によって新芽や花が染しめる生垣など、愛おしく感じられるなげない景色がなくなると書いていた。どこに行っても画一的な街ができ、スクラップ&ビルドのサイクルが早い日本では、そのスピード感も早く、街全体が気忙しい空気が満ちていると。

そういえば、街を歩く人

のスピードもどんどん速くなっていくように思う。以前ニューヨークに行った時、スニーカーを履き、スーツ姿で大腿速足で歩く女性がかっこいいと思いついたが、今から思うとそんなに急いでどこに行く？という感じがしてきた。

健康のためやダイエットのためのウォーキングは、脂肪燃焼効果を考えると1キロを10分から15分程度歩かないといけないそうだ。時速に換算すると6キロから9キロ。軽く息が上らないと効果がないらしい。道路は自転車で急ぐ人歩いて急ぐ人に占領され、ふらふら歩く人は邪魔者のようだ。人にやさしい街づくりを掲げていても、のんびり街の景色の変化を観察している暇はなさそうだ。

先日、道端でスーパー帰りのおばあさんが二足のペットボトルの重さに立ち往生していた。思わず声を掛け、家の近くまでお送りしたのだが、知らない人と関わるのもなかなか難しい都會暮らしではあるが、家を出て歩くことで、さまざまなお出合いを楽しむことができる。



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。